

考察

「二句目」「山青反照前」の「反照」の表現内容について

向島成美氏は著『漢詩のことば』（「あじあブックス」大修館書店）の中で、次のような詳細な論を展開されている。

漢語で「返景」「反照」の日本語訳が「夕日の照りかえし」とあるのが大半だが、この語の含む「光線が一旦何かに当たって反射する」意は漢語にはないのではないかという視点より論を起こされ、中国の古典籍より多くの用例を出し考察分析をなされている。

具体的には、中国詩史の上で夕日がうたわれるようになったのはほぼ三世紀初めの魏晋の頃で『詩経』や『楚辞』にもその例がないし、漢代においても夕日は詩にうたわれることはなかった。故に「返景」「反照」についての用例も『文選』や六朝詩の『玉台新詠』には見えない。「返景」の語が見えるのは唐・王維の「鹿紫」と「瓜固詩」の二詩で、特に後者の「瓜固詩」中の「返景」には南朝梁の劉孝綽の「侍宴集賢堂応令」中にある「反景入池林」を踏まえたものと考察され、この劉孝綽の詩句の「返景」には『初学記』巻一、天部上、日の項にある「日西落、光反照於東、謂之反景、（日西に落ち、光東を反照する。これを反景と謂ふ）」を背景とした使用例だと考察され、「反景」とは西から東の方向を照らす夕日の光そのものなのであり「反」は光が格別何かに当たって反射するというのではなく、太陽が沈む西とは反対の方向、つまり東へ光がかえるということの意味することごとくに思われる。「景」は太陽そのものではなく、光を意味する語と結論付けられている。

一方、「反照」も『文選』『玉台新詠』にその用例は見られず、唐以降の詩人にこの語が多く使われるようになった